長崎大学病院　vol.31
2012年7月

続ける力

病院ボランティア「ひだまりの会」15周年

地域と病院と人をつなぐ温かな存在

いつも玄関先で明るく患者さんを迎える長崎大学病院ボランティア「ひだまりの会」。病院の雰囲気づくりにひと役果たし、患者さんたちをサポートして今年7月で15年目を迎えます。今回は病院を支え続けるボランティア活動をテーマに話をしてもらいました。

開かれた病院目指して結成

河野氏　今年で15年目を迎える病院ボランティア「ひだまりの会」では50人以上が年間1万時間近くボランティアに関わってくれています。これは常勤5人分に匹敵する労働力になるわけです。長崎大学病院ではボランティアの活動がすごいという評判で、これだけ熱心に取り組んでいるところは珍しいようです。毎朝、玄関先に立ち、患者さんや来院された方たちにあいさつして案内していただいたり、院内には季節の花を飾る活動などをしていただいたりしています。活動を始めたころのお話を聞かせていただければと思っています。

山下氏　私はひだまりの会が発足して4年目から関わっています。発足当時のことはよく分からないのですが、患者さんのつらい入院生活を少しでも潤いのある病院にしようとボランティアの取り組みが始まったと聞いています。

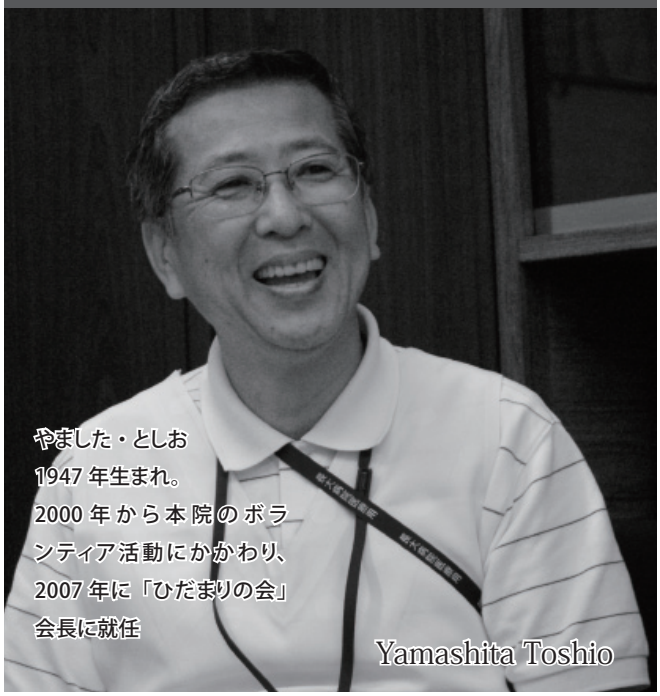
萩原氏　ひだまりの会は平成9年7月27日から、地域に開かれた病院を目指して結成されました。最初のころはコミュニケーションの取り方などを担当の看護師が専属で教え、ボランティアさんの育成に力を入れていたようです。今ではボランティアさんたちが自主的に積極的に企画して活動していて、ボランティアの方たちがご自身で活動されているからこそ、やりがいや達成感を感じていらっしゃると思います。

ここまで組織的に長く続いているところはないようですね。私が調べたところでは県内で日本病院ボランティア協会に加盟している病院は本院のほかに、長崎労災病院（佐世保市）と千住病院（同市）だけのようです。

河野氏　森内先生はボランティア委員会の委員長になってどのくらいですか？

森内氏　もう4代目です。5周年のときには就任していましたので、もう半分以上関わっています。

「ひだまりの会」会長　山下　俊男氏



河野氏　長く活動を見てきた先生の立場から、ボランティア活動はどう充実してきましたか？

森内氏　病院が建物を改築したり、大学そのものが大きく仕組みが変わったりしているときと重なって、患者さんにとって分かりにくく、使い勝手が悪いことがあったと思います。ボランティアさんたちはそれを補ってくれています。私はいろんな大学に講義で行くことがよくありますが、玄関先でお出迎えがあるところは見たことがありません。また、病院が生活の場になっている入院患者さんにとっても、季節の移ろいや世の中の行事が分かるような企

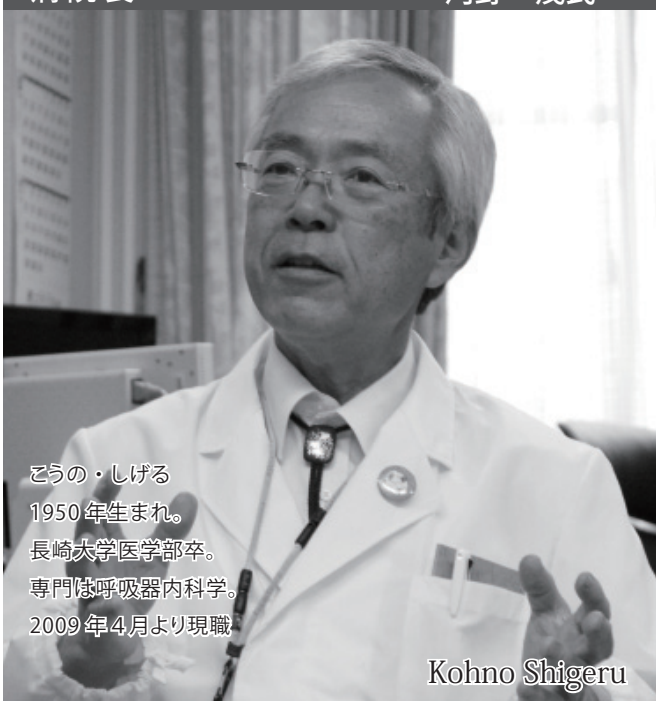
画をしたり、ちょっと気晴らしの本がほしいなというときに図書を貸し出してくれたりしています。それがひいては患者さんたちのストレスを軽減して、病気に立ち向かう力を生み出して、われわれの治療にもいい影響を与えています。

学生や60代以上が中心

河野氏　実際にどんな方たちが関わっていますか？

山下氏　常に50名ぐらいメンバーが入れ替わりな

病院長　河野　茂氏



がら、続けているメンバーは20名ぐらいです。先月の時点で、男性が10名、女性が48名。年齢構成は20代が18名、30代が2名、40代4名、50代が7名、60代以上が26名です。男性はほとんど定年を迎えた方が多く、私も51歳からボランティアに関わっています。

20代は学生さんが中心で、県立大学や長崎大学から参加しています。県立大学シーボルト校の学生さんは毎年4年生が卒業すると、次に引き継いで来てくれますので、次の1年間の計画が立てやすいです。長崎大学の場合は20時間の研修で受け入れています。

河野氏　県立大学の学生さんが活動する曜日はどうなっているんですか？

山下氏　曜日を分けて、朝から授業などに差し障りのない範囲で来てくれています。30代、40代の方は子育てしながら参加してくれています。

河野氏　子育て時期は育児に没頭することが多いようですが、ボランティアに参加されているんですね。感心ですね。

山下氏　今、小児科で活動していて、自分の子どもさんと接するように活動しています。逆に家庭での子育てにも役に立っているみたいです。

河野氏　最高齢は何歳ですか？

山下氏　82歳です。図書がぎっしり詰まった重いカートを押して病室を回っていますね（笑）。この方はわれわれの目標です。「○○さん」と患者さんを名前を呼ぶ雰囲気が家庭的でとてもいいんです。

患者さんの身近な存在

河野氏　具体的にどんな仕事が多いですか？

山下氏　外来、病棟での患者さんのお世話のほかにボランティア室での活動、みんな集まって月1回ティータイムを企画しています。

以前は入院受付の書類の書き方を補助することもありましたが、今では職員さんがサポートするシステムが整いました。そこで私たちは昨年度から始まった玄関の工事に伴って、事故などが起きないように案内に関わるようにしました。特に月曜の朝は患者さんが駐車を待たされることも多く、イライラしながら病院に入ってくることもあるでしょうから、「病気を治すぞ」という本来の気持ちで治療にのぞんでもらうためにも、機嫌をよくしてもらえるよう、努めて話しかけるようにしています。

河野氏　なるほど。実は来院された方たちへの声かけやフォローが防犯にもつながっているようですね。不審者を警戒するという意味ではなく、むしろ患者さんたちを気遣う温かい雰囲気の中で防犯という側面もあるような気がします。入院患者さんへのサポートはどうですか？

山下氏　洗濯や買い物などが中心ですが、図書の貸し出しもしています。年間3万冊近く出ていて、患者さんには喜ばれています。

河野氏　小児科の子どもさんにボランティアさんはいろいろと関わっているようですが、小児科として

どんなところが助かっていますか？

森内氏　子どもたちはぼくらのように痛いことばかりする医師の顔を見るより、遊んでくれる人たちが訪ねてきてくれるのは嬉しいようです（笑）。付き添いのお母さんたちも少しだけ自分の時間を持てるので、あやしてくれるボランティアさんの存在には助かっていると思いますよ。

河野氏　看護師さんの立場から、患者さんのご家族はどう受け止めているように見えますか？

萩原氏　医療従事者に頼みづらいこともボランティアさんには頼みやすいようですね。

患者さんの喜ぶ顔が原動力

河野氏　年１回、院内でボランティアの活動時間に対する表彰をしていますが、皆さん、トータルで何千時間とすごいですね。500、1000、2000、3000、5000 時間とあるようですが、山下会長はどのくらい活動していますか？

山下氏　今 9000 時間で、本年度中に１万時間を超えます。

河野氏　本院でボランティア活動が盛んな背景に長崎人の世話好きという県民性なのか、それともクリスチャンが多い土地柄で奉仕の精神が高いのか、分かりませんが。山下さん、なぜ活動を続けられるんでしょうか？

山下氏　最初は何か患者さんの役に立ちたいということで始めました。10 年ぐらい前は２、３カ月の長期の入院は当たり前でしたので、「来週も来てくれるよね？」「洗濯頼むね」というのは退院までずっと続きます。そうすると、患者さんとのつながりが生まれてきます。私は家で洗濯したことなかったのですが、頼まれれば嬉しくて、ついつい引き受けてしまうんですね（笑）。最初は洗濯機の使い方が分からず、洗剤を入れずに洗うこともありましたね。

萩原氏　大学病院には五島や県内の遠方から患者さんが集まりますから、身の回りの世話は独り暮らしの方や遠方の方にとってはありがたいですね。

河野氏　今まで活動していてよかったと思うのは、どんなときですか？

山下氏　この病院でボランティアに関わり始めたとき、病院の匂いが好きじゃなかったんですね。でも、いろんな方と知り合って励まされることや逆に自分たちが話し相手になって喜ばれることもあります。それが嬉しくてボランティアを続ける力になっているのではないかと思います。

職場環境を円滑にする声かけ

河野氏　森内先生、病院はボランティアの人に支えられていますね。ボランティアさんたちの存在は病院スタッフにどんな影響を与えていますか？

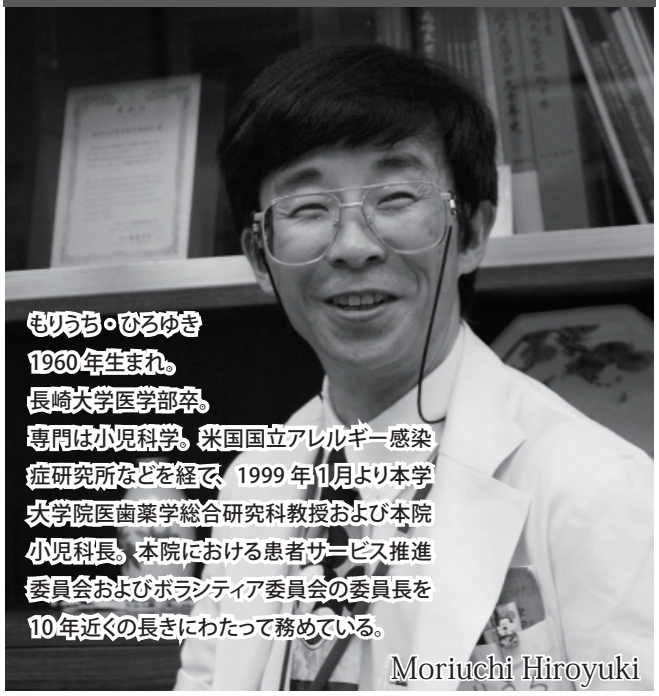
森内氏　当初は医師も看護師もほかの病院スタッフもボランティアの方に感謝の気持ちをきちんと表明

副看護部長　萩原　絹子氏

していませんでした。患者さんからの目から見ても、ボランティアさんは病院職員の一部で、医師や看護師の下で働いているという誤解まで与えていたと思います。ぼくたち自身が感謝している姿を示すと、患者さんたちにもボランティアさんたちが自分たちのために時間と労力をたくさん使って活動しているということを伝わると思います。それで皆さんとのコミュニケーション能力が高まって、お互いに意思の疎通やあいさつができるようになったのは本当によかったと思います。

山下氏　年齢の高いボランティアの方は先生（医師）たちから「ご苦労さま」とちょっと声をかけられる

ボランティア委員会委員長　　森内　浩幸氏



だけで、元気ややる気が出るみたいです。

萩原氏　ここまでボランティア活動が発展してきたのは病院との信頼関係があったからだと思います。心と心を紡いできた成果です。看護部としては、ボランティアさんたちが自分たちで解決できない問題が生じたときに積極的に協力していきたいと思っています。

河野氏　今、全国の大学では東大を中心に秋入学を進める動きがあります。そうすると、高校は春の卒業ですので、６カ月間の時間ができます。こういったときにここでボランティア活動を通して社会勉強する機会にしてもらいたいと個人的に思っています。

自立した活動支える寄付金

河野氏　ここまでくるのに、きれいな言葉だけでなく、かなりご苦労があったことでしょう。

森内氏　ひだまりの会の皆さんの活動はボランティアなので、病院の予算ではありません。医局などから拠出する寄付金でまかなっています。ちょっとした活動でも積み重ねると、頑張って活動すればするほど、やはりお金はかかります。全国の病院ボランティアの集まりへの情報交換のためにも出張旅費などでもお金は必要になってきます。

山下氏　ほかの病院のボランティアは資金集めが大変なようです。年１回、大阪で開かれる日本病院ボランティアの総会で、いろんなボランティアさんたちと意見交換しますが、自分たちが恵まれていることを実感します。ほかのところは工作の紙１枚でも自分たちで準備しないといけなかったり、バザーで資金を集めたりと、とても苦労されているようです。本当に私たちは病院の支えがあって活動できていますので、その分一生懸命、お返ししたいですね。

森内氏　海外では市民が病院の患者さんに何かしたいとき、患者さんのために活動しているボランティアさんの活動に資金援助するところもあります。日本でも昔は病院へのお礼として金銭を包む方がいらっしゃいました。今ではそれはできない時勢ですが、そういった感謝の気持ちを病院ボランティアの活動資金として寄付を受けるなど、いろんな工夫ができると思います。

河野氏　大学病院だけでなくて、県内に広めていきたいという思いがあります。どうしたら、ほかの病院に広がっていくと思いますか？

山下氏　先ほど森内先生が言われたように、病院スタッフのボランティアへの理解だと思います。ボランティアを入れる覚悟ですね。最初はお互いに何をしていいのか、右往左往して分からない状況があるはずです。私たちも最初のころはボランティア同士のコミュニケーションが不足していて、お互いに顔を合わせることがありませんでした。しかし、活動を終えたときに、担当の師長さんが「今日どうだった？」とお茶を出して反省会をしてくれました。それがとても印象に残っています。みんなで話し合う時間ができて、互いに励ますようになって、それがまた次の活動につながってくる。そうすると自然と活動時間も長くなるわけなんですが。院内に核となってコーディネートできる人がいればいいのかなと思っています。

河野氏　15年間も患者さんのために、病院の皆さんのために、活動を続けていることに感謝しています。病院にとっていい影響を与えてくれるこういったいいことの輪が県内の病院に広がったら嬉しいですね。これからもよろしくお願いします。本日はお忙しい中、ありがとうございました。